

鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センター

平成 29 年度 報告書

学校法人享栄学園

鈴 鹿 大 学

目次

I. 事業概要

- I-1 事業の趣旨・目的
- I-2 これまでの事業の振り返り
- I-3 29年度開催事業の概要
- I-4 MIE 学生ベンチャーサミットの開催

II. MIE 学生ベンチャーサミット開催記録

- II-1 MIE 学生ベンチャーサミットプログラム
- II-2 開会の挨拶
- II-3 基調講演「スポーツ・観光・イベントから学生ベンチャーへ」
- II-4 三重県内の高校生・大学生によるビジネスプラン発表&交流会
- II-5 全体講評
- II-6 閉会の挨拶

III. 資料編

- III-1 学生ベンチャーサミット来場者アンケート

I. 事業概要

I-1 事業の趣旨・目的

I-2 これまでの事業の振り返り

I-3 29年度開催事業の概要

I-4 MIE 学生ベンチャーサミットの開催

I-1 事業の趣旨・目的

三重県では、地域の持続的発展に向けて、若年層の県外流出防止、県内定着への働きかけが喫緊の課題となっている。高等教育機関にあつては、変化に対応できる知的構想力を身につけ、主体的・自律的に多様な他者と相互作用し、新たな知識を創造する資質や能力を身につけた人材の育成が急務である。ここでは、地域ビジネスのイノベーションによる新規雇用の創出など、高等教育機関として地域課題解決へ貢献することが求められる。

鈴鹿大学では、「鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センター」を新設し、大学院、学部、短期大学部が一体となり、オール鈴鹿大学体制で三重県の産・学・官の課題に応える人材育成と研究開発を目指すものである。

本学では、全学共通科目として「鈴鹿学」を開講し、グローバル社会の中で「地域を学び、地域の課題に向き合い、地域とともに解決策を考える」といった取組を進め、一定の成果をあげてきた。これに加え、新設する「鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センター」を中心に、「起業家の養成」や「起業マインドをもった人材の育成」を支援する実践的教育プログラムを立ち上げる。本事業は、現行のカリキュラムと融合し、鈴鹿大学の目標、今後の方向性とも合致する中核的事業である。

創造性に富み、社会通用性（耐久性、ストレス耐性など）を備えた起業家精神こそがイノベーションをもたらし、地域の持続的発展の源泉となる。ビジネス・イノベーションは、顧客に対する新しい価値の提供や新たな市場の創造をもたらす。そこでは、「モノ（づくり）」の先にある新しい価値を創造する「コト（づくり）」まで踏み込んだイノベーションが不可欠である。

本事業の目的は、①起業家の養成と起業マインドをもった人材の育成、②起業に興味をもった入学生の確保、③県内起業、企業就職の支援である。

この目的を達成するためには、本学の特色を活かし、「地域〈学〉」に「多文化共生〈学〉」の視点を取り込み、そして全学が一体となった組織体制により、地域の持続的発展に必要な人材の育成を図りたい。

I-2 これまでの事業の振り返り

鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センターは、平成27年度三重県高等教育機関魅力向上補助金の採択事業の一環として、平成27年11月に設立された。これにともない、平成28年3月12日に、設立記念シンポジウムを開催し、地域における起業の可能性と大学の課題に関して有識者を交えて広く議論を行った。

【参考】設立記念シンポジウムの開催と開催を伝える新聞記事

鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センター設立記念シンポジウム
“地域で稼ぐ～地方創生・グローバル化と起業・人材育成の未来～”

プログラム

- 13:00 開会（開会挨拶／市野聖治・鈴鹿大学学長）
- 13:05 趣旨説明（渡邊聡・鈴鹿大学講師）
- 13:10 （講演1）高校生起業家の見る世界
仲田 洋子 氏（カッシーニ 株式会社 代表取締役兼 CEO）
- 13:40 （講演2）あるものさがし 人口減少、グローバル化と地域からの挑戦
岡本 栄 氏（伊賀市長）
- 14:10 （講演3）夢古道おわせの挑戦と人材育成
伊東 将志 氏（株式会社熊野古道おわせ 支配人）
- 14:50 パネルディスカッション・会場との質疑応答
パネリスト／仲田氏、岡本氏、伊東氏、市野学長
ファシリテータ／渡邊聡・鈴鹿大学講師
- 16:00 閉会（閉会挨拶／高嶋重次・鈴鹿大学副学長）



高校生起業家ら登壇
鈴鹿大でビジネスセミナー

地域で自立した経済力をアームにしたシンポジウム「地域で稼ぐ～地方創生・グローバル化と起業・人材育成の未来～」（中日新聞社）

後援が十二日、鈴鹿市の鈴鹿大であり、学生や市民ら八十人が聴講した。

講演では、沖繩県の高校一年生の仲田洋子さんが登壇。世界に広がる沖繩出身者の活躍を、中高生に発信する

15歳で起業した経緯などを話す仲田さん（鈴鹿市の鈴鹿大で）

伊賀市の岡本栄市長は「あるものさがし」と題し、昨年六月のイタリア・ミラノ国際博覧会など、国内外で忍者や伊賀牛といった地域資源の発信に努めた成果を話した。観光施設を運営する「熊野古道おわせ」（尾鷲市）の伊東将志支配人も交えた公開討論もあった。

シンポジウムは、鈴鹿大が起業精神を持った学生を養成する「ビジネス・イノベーション研究センター」を一月に設立したのを記念して開いた。

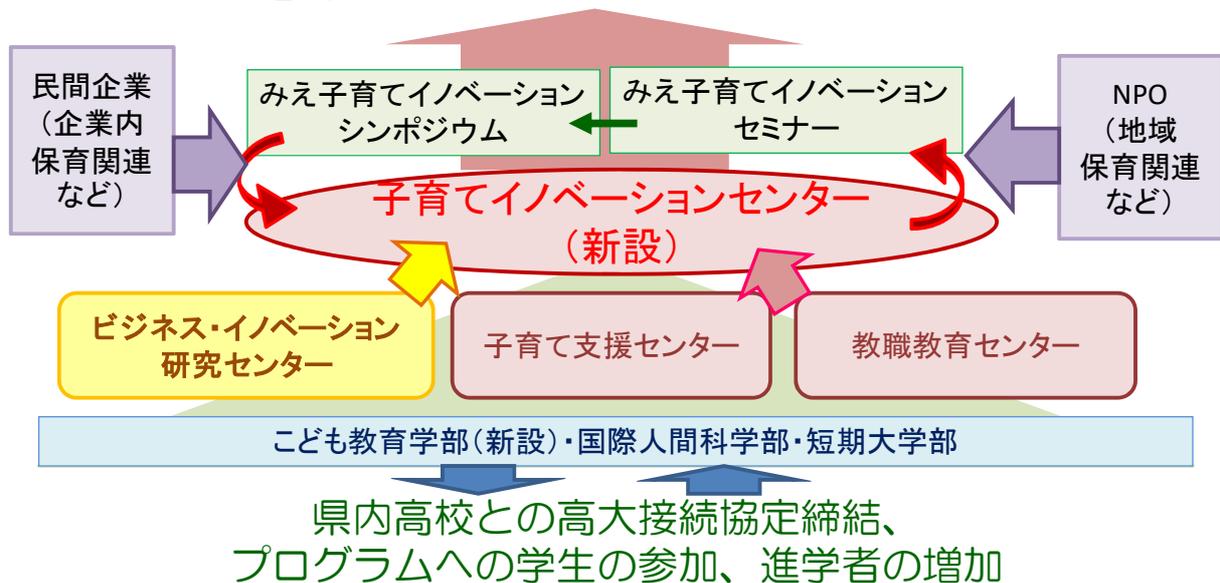
（山本克也）

インターネットサイト運営会社を十五歳で起業した経緯などを説明した。

「高校生起業家らが登壇 鈴鹿大でビジネスセミナー」中日新聞 2016年3月13日付朝刊

平成 28 年度事業では、本学教員が有する多様な専門的知見を融合することで地域社会のイノベーションに資する事業を展開することを目的としている。平成 28 年度三重県高等教育機関魅力向上支援補助金の申請にあたって、推進会議内で議論を重ね、「地域ぐるみ事業による子育ての魅力がミエる県づくりプロジェクト」という事業名で申請し、結果として平成 28-30 年度の採択事業となった。以下に、採択事業の概要と、事業におけるビジネス・イノベーション研究センターの位置づけをまとめた。

県内子育て・子育て支援関連職への就業者数の増加 県内子育て・子育て支援関係者のネットワーク形成 地域とのネットワークを有した教員の養成



事業概要として「地域ぐるみで子育ての魅力を再発見する」をコンセプトに、①県内で子育て・子育てにかかわる人材育成・創出、②県内の地域別ニーズに合わせた子育て・子育て支援のための地域連携型システムの構築と関連ジョブの創出、以上 2 点の事業を展開することとした。また事業の目的として、「三重の子が三重で育ち三重で生活する」サイクルを確立するために、[1]県内で学ぶことに意欲的な学生の確保、[2]意欲と実践力を有した子育て・子育て支援人材の育成と活用するシステム、[3]地域全体で子育て・子育て支援を行うための大学内ハブの構築・運営、以上 3 点を挙げた。

すでに、子育てイノベーションセンターの事業は動き出しており、公開シンポジウムの開催、子育て支援事業の展開、子育て支援員の育成等の事業を展開していることから見ても、ビジネス・イノベーション研究センターでの議論が萌芽となったと評価できる。

また、平成 28 年度では、学外から起業家をお招きし、起業に関する経験談をお話いただくと同時に、そのなかから起業する際のポイントや課題、修得すべき知識や素養などを学生が学ぶ機会を設けた。以下が開催日時と講師の一覧である。

起業家を招いた研究会(学生参加の演習の一環)	
第1回(4月14日)	小野真由美(ゲミュートリヒ珈琲・代表取締役)
第2回(6月9日)	林勇作(株式会社センチュリークリエイティブ・代表取締役)
第3回(7月7日)	高橋佐和子(株式会社キト・ド・オール・代表取締役)

起業家交流会に関しては、新聞等メディアにも取り上げられることで本センターの事業内容が地域社会に広く知られる契機にもなった。また、各回の交流会はニュースリリースを通じて学外からの参加者も募った結果、地域の起業希望者や県の起業事業関連の職員などの学外参加者も得られた。

【参考】第1回起業家交流会の新聞記事

「夢がかなうと人生に深みが出る」などと話す小野さん＝鈴鹿市の鈴鹿大学で

「コーヒーで起業 小野さん体験談」鈴鹿大で講演会」中日新聞、2016年4月16日付)

【参考】第2回起業家交流会の様子



【参考】第3回起業家交流会の様子



このほか、平成 28 年度の事業として、学外から若手の研究者・専門家をお招きし、また本学教員からも研究報告を行うことで、相互の研究交流と質的向上を目指すこととした。研究交流会は、本学教員・大学院生のほか、三重大学・中部大学・鈴鹿高専・近大高専など近隣の大学や高専の研究者が集まった。以下が今年度の研究交流会の報告者と論題である。

平成28(2016)年8月3日 「地方創生とこれからの観光まちづくり」	
郭育仁(鈴鹿大学・講師)	「インバウンドによる地域のまちづくり」
磯野巧(三重大学・講師)	「徳島県における地元住民を主体としたまちづくりの諸相」
平成28(2016)年12月7日(水) 「地域ビジネスにおける企業家育成への課題」	
織田拓(美杉町上多気地区奥立川自治会長)	「地域で企画する。どんな事も成功させるコミュニティの作り方」
藤井辰朗(中部大学・講師)	「ベンチャー企業の資金調達と投資」

【参考】第 1 回研究交流会の様子



【参考】第 2 回研究交流会の様子



そのうえで、平成 28 年度は三重県雇用経済部の協力の下、三重県との共催、SUZUKA 産学官交流会の後援を得て、2017 年 1 月 27 日 (金) 「三重を元気にする若者・グローバル創業のススメ」と題して開催された。本シンポジウムは本センターの 1 周年記念シンポジウムとして開催された。

基調講演として三重県雇用経済部中小企業・サービス産業振興課の増田行信課長より、三重県における「グローバル創業の意義」についてご講演いただいた。人口減少社会をひかえ、国内需要の低下が危惧される日本において、三重ではミキモト真珠に始まり、過去から現在に至るまで三重発のグローバルを見据えた起業家を輩出していることが紹介された。次に、留学生も含めた本学学生からビジネスプラン3本の発表を行った。

最後のパネルディスカッションでは、日本貿易振興機構（JETRO）三重貿易情報センターの吉良大嗣所長、百五銀行地域創生部の滝川充課長、UCCO株式会社の手塚典子社長をお迎えし、三重県からグローバル創業を志す創業者の実像および必要とされる人材像について、明らかにしていった。

本シンポジウムの特徴として、学生の日常の学習成果を学内外の人々に発表し、かつ専門家からのアドバイスを得る機会を得た点である。このことは、本学学生の学習意欲の向上だけでなく、今回は発表機会のなかった学生や入学予備軍の学生への波及効果をもたらすものと考えられる。またシンポジウム参加者が1年前の設立シンポジウムより大幅に増加し（73名→121名）、学外からも多様な参加者が参加した点も、本センターの事業による地域への貢献という点からも大きな収穫といえよう。

【参考】公開シンポジウムのプログラムと当日の様子

MIIEスタートアップシンポジウム 三重を元気にする若者・グローバル創業のススメ

開会挨拶 鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センター長 市野聖治（鈴鹿大学学長）

基調講演 「グローバル創業の意義について」

三重県雇用経済部 中小企業・サービス産業振興課 課長 増田 行信

鈴鹿大学学生によるビジネスプラン発表

①「地域支援ビジネス」

イノベーションマネジメント履修生 アップルウィンターチーム

②「D. system」

イノベーションマネジメント履修生 SADチーム

③「中古釣り具輸出ビジネス」

演習Ⅰ（高見ゼミ）履修生 ゴホアン ガン

パネルディスカッション「三重県を元気にするグローバル創業とは」

日本貿易振興機構（JETRO）三重貿易情報センター 所長 吉良 大嗣

百五銀行地域創生部 課長 滝川 充

UCCO株式会社 代表取締役社長 手塚 典子

鈴鹿大学国際人間科学部 専任講師 高見 啓一

開会挨拶

鈴鹿大学ビジネス・イノベーション研究センター副センター長 渡邊聡



I-3 29年度開催事業の概要

平成29年度事業として、「起業家×学生研究交流会」として、起業経験者と学生が直接交流できる小規模な研究会を開催した。4月13日(木)には、経営のわかるデザイナーとして、販促や商品デザインのコンサルタント・デザインを行っているOI企画室代表、杉律子氏をお招きした。また、6月22日(木)には、訪日外国人向けの「コスプレ体験(撮影)サービス」を実施している大阪日本橋の写真スタジオ「Four-M」を運営する高尾元健社長をお招きした。

起業家×学生研究交流会

第1回(4月13日)	杉律子(OI企画室代表)
第2回(6月22日)	高尾元健(写真スタジオ「Four-M」代表)

【参考】第1・第2回交流会の様子



I-4 MIE 学生ベンチャーサミットの開催

平成30年2月17日（土）に三重県・日本政策金融公庫との共催による「MIE 学生ベンチャーサミット」を開催した。

基調講演として、有限会社 S-Produce の下宮勇生・代表取締役 CEO が登壇し、自身の学生時代の起業経験や地域の人々と連携した商品開発の経験から、『分かる』と『できる』では違う」「プランを形にして色々な人に見てもらおう」「チャンスを得るために色々な人に会いに行こう」といった、学生時代にあるべき過ごし方について、講演した。

後半の県内5校7チームの高校生・大学生が各校で取り組んでいるビジネスプランや実践についてプレゼンした。どのプランも新しい着眼や発想があるだけでなく、他校では実際に情報誌や旅行プランの実践、セレクトギフトの検討・分析などを行っていた。また、発表を聴くだけでなく、お互いに活動の「情報交換」をする姿も見られ、参加者同士活発に交流した。

閉会挨拶では、鈴木英敬・三重県知事から、100名を超える参加者に対し、「若い力で世の中を変えることができる」「三重県で一つでも学生ベンチャーを実現してほしい」と熱いエールをいただいた。

【参考】MIE 学生ベンチャーサミット当日の様子

